

## 父に届ける本当の気持ち

高山市立朝日中学校 3年 小川 晃輝

「うるさい、話しかけるな」

僕はいつも、自分の言葉に後悔する。今ではもうこの言葉は、僕の口ぐせと  
なってしまった。

僕の父は警察官だ。いわゆる転勤族で、単身赴任をし、一緒に生活をしない  
事も多い。だが、心の中では、それを大いに喜んでいる自分と悲しむ自分がい  
る。僕だって、いつもけんかをしていたい訳じゃない。それは父も同じはずだ。  
それならなぜだろう。父と僕がこんなにもすれ違ってしまうのは…。

そんな時、僕に何が大切なのかを気付かせてくれる出来事が起きた。ある日、  
父は、自分の友達が亡くなり、そのお葬式に出席するため、岐阜まで出掛けた。  
お葬式も終わり、これから高山に帰るから、と連絡が入った。やっと終わった  
のかと、ほっとした瞬間、もう一度家の電話が鳴った。信号無視の車が赤信号  
で交差点に突っ込み、父の車が大破したようだ。電話を持つ母の手が震えてい  
た。いつもはのん気な僕も、母の様子で事の重大さを悟った。その後、何度も  
電話をかけたが、父の携帯電話にはつながらず、

「只今、電話に出る事が出来ません…」

このメッセージが僕らを、どれだけ不安な気持ちにさせた事だろう。近くでの  
事故なら直ぐに駆けつけるのに。何もできないまま、時間だけが過ぎていった。

長い沈黙の後、母が幼い頃の僕と父の話を始めた。母は心配で心配で、何か  
話をしていないと、気が滅入ってしまいそうだったのだと思う。幼い頃の僕は、  
お父さん子で、夜勤明けの父を寝させないくらいくっついていたそうだ。父が  
疲れて寝てしまうと、その隣で同じ格好をして寝ていたらしい。普段は、夕食  
を食べた後、全ての面倒を父が見てくれた。お風呂に入れ、アトピーの薬を塗  
り、絵本の読み聞かせまでして、僕を寝かしつけようとしてくれていたらしい。  
今となっては、「あの父が？」とってしまう。時には読み聞かせの絵本が10  
冊以上になる事もあったようだ。それは、僕が小学校に入るまでの6年間にも  
及んだ。父が遊びに連れて行ってくれるのは、いつも決まって図書館だった。  
それは小学校に入ってから続いた。人目も気にせず、父は声色を変えてまで  
絵本を読んでくれた。そういえば、大きくなってから一人で図書館に出掛けた  
時、自分では借りた覚えのない絵本に不思議と懐かしさを感じた。絵本を開け  
てみるとあらすじを全て覚えていた。そして読んでいくうち、登場人物の声が  
父の声と重なって聞こえてきた。確実に、僕の記憶の中には、あの頃の優しい  
父の姿があった。

母の話も終わる頃、ようやく待ちに待った連絡が来た。

「お父さんは大丈夫。体は少し痛いけど歩けるで、心配するなよ。明日は学校やで、早よう準備済ませて寝るんやぞ」

こんな内容だった。自分の事で精一杯のはずなのに、僕の事を心配してくれていた父に、我慢していた涙が止まらなくなった。無事だった事に安心をしたのと、父の大切さ、ありがたみに改めて気付かされたからだ。

いつも父に言われる事がある。

「今を大事に生きろ。今日という日は二度と戻ってこないんだぞ」

父は職業上、危険と隣り合わせで、いつ死んでもおかしくない。後から謝ればいい、後から感謝をすればいいと思っただけは、間に合わないこともあるのだ。僕は今まで、自分の本当の気持ちに逆らって、親に反抗し続けてきた。それが原因となり、毎日の口げんかにもつながっていたのだと思う。父と言い争い、いつもけんかばかりして無駄に過ごしてしまった大切な時間の一つ一つは、もう戻ってこない。だから、今を大切に、自分の気持ちに素直になることが、父との時間をより楽しく幸せなものにできると思う。それが、家族みんなの、そして僕にとっても一番大切な事なのではないだろうか。一緒に生活しない事、父が不在な事を喜んでいた僕は、もうどこにもいない。

でも、悲しい事に僕は、今まさに、反抗期の真っ只中にいる。心では分かっているけど、思った通りに体が動いてはくれない。母は時々、そんな僕に、

「仕方ないさ。心が成長しとる証拠やで。お母さんもそうやったで、大丈夫」

と、優しく声をかけてくれる。いつ、自分に、そして親に対して心から素直になれるのかは分からない。でもこの出来事のおかげで、少しは変わったと思う。これからは、心と心でぶつかり合うことで、お互いの心の壁を壊していきたいと思う。いつの日にか、僕のいつもの口ぐせが、

「ありがとう。ごめんなさい」

に変わる日まで、もう少し待っていて欲しい。父さん、大好きだよ。